



言っちゃ駄目だ  
兄さんっ

「死ななきゃならないのは…」

隻眼が加夏子を睨んだ。

「いうなあー！！」

殉が頭から堀川の胸元に突っ込んだ。  
無茶苦茶に手足を振り、叩き、叫んだ。  
次の言葉を言わせまいとするかのように。

押し包むように堀川が殉を抱きかかえる。  
それでも尚、ありったけの声で喚き身悶えし続けた。

「いうなあ！ にいさああ～ん！！ うああああ～！！！！」

## 殉、だ

殉の声が止んだ。  
三つの影の隙間を、宵闇が埋めてゆく。

◇

「わからない」

加夏子がぼつり、言葉をこぼした。

「もうわからない。わたしを斬ったのがあなた、あなたは殉のおにいさん、殉はわたしの大好きなひと…その殉が死ぬって…何なの？ 何が起ころの？ 何でこんなこと聞かされるの？ なんてこうなっちゃうのよ！ ねえ…教えて、誰でもいいから！ なんか言ってよ！ こたえてよおー！！」

「僕の身体、もう駄目なんだ」

堀川の腕の中から乾いた声が響く。

「そんな風に生まれちゃったんだよ。だからお医者にも治せない。この歳まで生きてこられたのも、奇跡みたいなもんだって言われた」

「そんな…そんなのって…」

「知られなくなかった」

「何人も殺してきた、闘いの中で。人は簡単に死ぬ。だが簡単に死ねない者もいる。殉がそうだ。お前は俺を死ぬまで憎めばいい、だがお前は、好きな男の死に向き合えるか？ 目をそらさず最後まで見届けられるのか？」

腕をほどいて堀川が立ち上がった。

殉は力なく俯き、膝を落としたままだった。

「弟はお前を選んだ。清水 加夏子。あとはお前次第だ。俺を憎むように殉を憎むか、それとも最後まで共に生きてみるか。すきなほうを選べ」

堀川はすっと後ろを向くと、そのまま宵闇の向こうへ消えていった。

あとには、もうどっぴりと闇に包まれた二人が動かずにいるだけであった。

◇

ふえっくしょん！

やっと市街地まで辿り着いた九十九は、盛大なくしゃみと共に今夜の宿を見上げた。

「CAEBV（慢性活動性EBウイルス感染症）、か…」

誰に言うでもなく呟いた。

空はもう真っ暗だった。

◇

一週間が過ぎ、佐野碧の容態は快方へと向かっていた。

重傷の北山とヨシオ、そして物言わぬ廃人御一行様（これ程徹底的に人体を破壊出来るのは鬼かゴジラかと医師達は噂していたが、患者はみな尾道では名の知れた悪党ばかりで、同情する者は一人もいなかった。勿論、真山を告発する者などいる筈もなかった）を残し、殉と加夏子は東京へ帰る日を迎えた。

まだ傷が癒えない殉は碧と車両での移動、加夏子は九十九と列車での帰京となった。  
真山と柴田刑事は北山に付き添い、もうしばらく尾道に残るとの事だった。

「気を…つけて、ね」

「うん」

病院前のエントランス。しばしの別れ。

加夏子の言葉も、殉の態度も、どこかたどたどしくぎこちなかった。

あの日、殉の兄が告げたひとことが二人の間に溝を作っていた。

突きつけられた現実を受け止め切れない心が、互いに正面から向き合う事を躊躇させていた。

「いろんなこと、あったね」

「うん」

「いっぱいありすぎて、ワタシ、何がなんだかわからなくなっちゃった」

「…」

「すこし、一人で考えてみるね」

「…うん」

「東京に帰ったら、はなそう。ふたりで」

「…」

殉は加夏子と目を合わそうとしなかった。

加夏子も。

◇

「さ、いくよ」

暫くして迎えに来た九十九に促され、加夏子はタクシーの後部座席に乗り込んだ。

「帰りは新幹線だ。少しは眠れるだろう」

杖を脇に立てかけ、九十九が優しく声を掛けた。

タクシーがゆっくりと走り出す。

「よく見ておきなさい、この景色を。君を連れだし、引きずり回し、そして連れ戻したこの場所を。忘れないよう胸に刻んでおくんだ。ここが君を変えた場所だ。もう二度と同じ景色を見る事はない。次に見る時は全く違うものになっているだろう」

九十九はいつになく饒舌だった。

「人も場所も、思い出と一緒にうつろってゆく。君はたぶん、普通の人の何年分もの体験をここでした。それはいつかきっと君の宝物になるだろう。だから、忘れないで欲しい」

そこまで言って九十九は口を閉じた。

不意に加夏子が振り返った。

ウィンドウをおろし、窓から身を乗り出すと声を限りに叫んだ。

じゅ——んっ！

まってる！ まってるからあああ～！！

◇

仕事が減ったのは、いい事なのか、悪い事なのか

担当が終わった夕刻、いつも通り銀さんは中庭のベンチで煙草をふかしていた。

お嬢が歩けるようになったのはケッコウなこった  
まだ杖の助けが必要だが、ありゃあもう大丈夫だ  
街を闊歩出来るようになるのもそう遠い日の事じゃねえだろう  
自宅からの通院に切り替えたのもいい訓練になる筈だ  
だがなあ…

ふんぞりかえって煙を吹き上げながら銀さんは顔をしかめた。

いったいどうしまったってんだ？  
あんなに頼りにしてた坊やと、なんでひとことも口をきかねえんだ？  
いや、『口をきかない』んじゃない  
避けてるんだ、二人とも  
まるでボクサーみてえに相手を伺ってやがる  
尾道なんて田舎で、いったい何があったってんだ

渋い顔で煙草をふかし続ける銀さんの隣りに、細身の白衣が腰を降ろした。

「いつ見てもいかつい顔ですねえ～」  
「るせえ。テメエがなんも教えねえからだ」  
「知りたいんですか、尾道での事」

九十九は銀さんが手にしたピースをさっと取り、手慣れた手つきで一本振り出した。

「おまえタバコ吸うのか？」  
「気が重い話をする時だけですが、ね」

火を催促する九十九に、銀さんはライターを差し出した。

「プロイラーという精神科医が、統合失調症の予後について纏めたものがあります」

煙を吐き出しながら九十九が言った。

急に発病、急に人格崩壊 5～15%  
慢性的経過から崩壊 10～20%  
急性から慢性軽症 5%以下  
慢性経過から慢性軽症 5～10%  
急性を繰り返しつつ崩壊 5%以下  
急性を繰り返しつつ慢性軽症 30～40%  
1回か数回の急性ののち治癒 20～35%

「清水さんの場合、急性を繰り返しつつ慢性軽症の分類にあてはまるでしょうね。尾道でもけっこう暴れましたから。それがいい方向に作用して、彼女の足は動くようになりましたが」

「んな事はどうでもいい！ …いや、どうでもよくはないんだが、それよりあの二人に何があったんだ？ なんで二人して敬遠してる？ エミちゃんの事と関係あるんだろ、もったいぶってねえで教えろ！」

九十九はもうひとふかし煙草を吸うと、指で弾いた。

「彼…もう長くはないかも知れないんです」